

地域のことばと日本語教育

—— 宮崎で日本語を教える人のために ——

早 野 慎 吾

(宮崎大学教育文化学部准教授)

§ 1. 日本語教育で方言はどう扱うべきか

地域社会で生活する日本語学習者は方言という問題に直面します。通常、日本語教育では標準語・共通語の教育が優先され、方言が扱われることはありません。しかし、教室で学習することばと地域で使われていることばが違うために、不便を感じている学習者が多いのも事実です。関西地域を調査した佐治(1988)では「おおきに(ありがとう)」を「大きい」と判断した留学生が銭湯を出るときに「おおきに」といわれ、太っているので気分を悪くしたという例が報告されています。方言は通じないだけでなく、誤解を生じさせる危険性もあるということです。

各地で方言によるトラブルの例が報告されています。そこで1990年代はじめ、教室でも方言を教えるべきかどうかということがよく話題になりました。生越(1991)では、方言を教えた方がよいという意見が強くなってきていると報告しています。ロング(1992)も、「自然習得」は非能率的で、しかも混乱を招く場合も多いため、教室での体系的な方言教育の必要性を説いています。

それならば、方言を教えればよいということになりそうですが、そう簡単にはいきません。その学習者はその土地に何年いるのでしょうか。限られた期間しかいないのに、そこでしか通用しないことばを学ぶ必要性はどのくらいあるのでしょうか。方言を学習するのに、どのくらい労力を必要とするのでしょうか。その学習者が母国に帰って日本語教師になった場合、学習した方言を共通語として教えてしまうかもしれません。また、ある学習者は学んだ方言をその土地で使うかも知れません。外国人が方言を使うことに好意的でない日本人は多いという調査報告もあります。方言を売り込んでいる外国人タレントもいますが、外国人が方言を使うことのデメリットは大きいのです。方言は使い方によっては人間関係に影響します。方言を教育する前に、まず日本語教師が方言の機能や役割、方言を教育した場合のメリット・デメリットを十分に知っている必要があるのです。

何かの要因で学習者が方言を覚えた場合でも、方言を理解することは大切だが、使わない方がよいことを説明する必要があります。これは方言に限ったことではありません。基本的に日本語教育では文体の低いことばは扱いません。文体の低いことばは使い方を誤ると人格を疑われることもあるのです。本稿では、方言を解説していきながら、日本語教育で方言をどのように扱うべきなのかを考えてみたいと思います。

§ 2. 方言とは

方言という用語は、一般では、全国的に使われることのないめずらしい語句の意味で使われます。たとえば、宮崎方言と言えばテゲ(とても)やグラシー(かわいそう)などを思い浮かべる人も多いでしょう。ヤマイモヲホル(酔ってくだをまく)などの慣用句を思い浮かべる人もいるかもしれません。各地でよく目にする『～方言集』などの多くは、その地域のめずらしい語句を集めたものです。

方言ということばは平安時代初期のものと思われる『東大寺諷誦文稿』に既に用いられており、奈良や京都などの中央語に対する「田舎のことば」「辺境のことば」の意味で使われています。確かに方言というと現在でも田舎のことばというイメージがあります。それでは現在の中央である東京のことばは方言でしょうか。

方言学においては、東京のことばも東京方言として扱います。方言学では、ある地域の全言語体系を方言とします。地域差のある語だけでなく、地域差の無い語も合わせて方言として扱います。この意味では、アタマ(頭)やハシル(走る)なども、その地域で使われていれば方言の一要素になるのです。方言と対立することばは中央語(東京語)ではなく共通語や標準語です。

また、社会言語学という分野では、くだけた場面で使われる話しことばの意味で方言を使います。場面によることばの違いを文体の違いといますが、実は、この場面(文体)という概念が日本語教育にとって大切なのです。方言が単なる地域のことばとして片付けられないのは、この場面差(文体差)が大きく関係しているからです。場面(文体)については後ほど詳しく解説することにします。

大阪弁、宮崎弁などの～弁はその地域の話しことばという意味で使われます。この～弁は社会言語学で使われる方言の意味に近いのですが、場面差を考慮しないという点においてやや違う概念といえます。

方言の意味についていくつか解説しましたが、ここではみなさんが理解しやすいように地域差のあることばを方言と表現することにします。ただし、語彙に限らず、発音、文法、句、文なども含めて考えます。また、できるだけ宮崎県方言を例として解説したいと思います。

§ 2. ことばの地域差と世代差

ことばの地域差は語彙だけでなく、発音や文法などにも観察できます。「白い」をシリ・シリーと発音すること、「高い」をタケ・タケーと発音することなどは発音に関することです。宮崎県のほとんどは無アクセント域に属していますが(一部尾高一型アクセント)、このアクセントも発音に関することです。「行かなかった」「食べなかった」をイカザッタ・クワザッタというのは文法に関することです。ヤマイヲオホル(山芋を掘る)などは、酔漢のくどくしつこいさまが、山芋を掘る大変さに似ていることからできた比喩表現です。これなどは、標準語や共通語と同じ表現でありながら、その地域独特の意味をもつ慣用句です。地域差はことばのあらゆるレベルにおいて観察できるのです。

2.1 新しい方言の発生

近年はことばの地域差が急速に失われてきているといわれています。マスメディアや交通手段の発達がその大きな要因といえます。宮崎県も例外ではありません。宮崎県でもかなり標準語化、共通語化が進んでいます。宮崎大学教育文化学部国語学研究室では2005年度から現在に至るまで、宮崎県の方言調査を行ってきていますが、多くの伝統方言が消失していることが確認できました。宮崎県の方言は豊日方言に属する日向方言と薩摩方言に属する諸県方言とに大きく区画できます。「可愛い」に対応する方言としては、宮崎市(日向方言)ではムゾラシ、都城市(諸県方言)ではムジが使われていましたが、どちらの地域も共通語形カワイイが使われるようになっていきます。

「蛙」は宮崎市ではビキタロ、都城市ではビッキョが使われていましたが、現在では、どちらの地域も共通語形カエルが使われています。

また、新たな方言が発生して地域差が無くなる場合もあります。「青痣」は宮崎市ではクロジン、都城市ではツグロジンが使われていました。それが宮崎市・都城市ともにアオジンを使用しています(図1)。

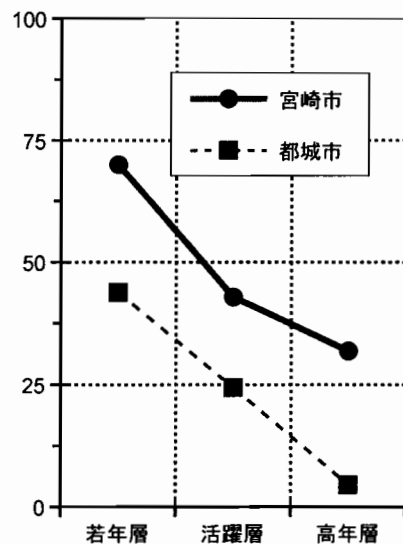


図1.アオジンの使用率(早野2007a)

日向方言と諸県方言の地域差がこの項目では失われつつあることがわかります。アオジンタンのような新しく発生した方言を新方言といいます。方言にはケズル(すく、髪を〜)のように古語が方言的要素となって使われているものもありますが(太平記三五・北野通夜物語事「一度食するに土来れば終へざるに急ぎ是にあひ、一たび梳(カミケズル)にも訴へ来れば先是をきく」)、新しい方言もあるのです。ことばは常に変化してきています。そして、ことばの変化が地域で異なるために地域差が生まれるのです。

新方言が発生すると、新たに地域差が発生することもあります。「大きい」に対応する表現は、国立国語研究所編(1966)『日本言語地図1』から、ほぼ宮崎県全域でフトイが使用されており、さらに宮崎市とその周辺域の数地点でオッケネがフトイと併用されていたことが確認できます。オッケネは共通語のオーキナ(形容動詞)と語形が近かったことが勢力を拡大した大きな要因と考えられます。日向方言域に対して諸県方言域では、現在でもフトイが使用されているため、日向方言と諸県方言で新たな地域差が発生したのです。図2は早野(2007a)による宮崎県南部域調査の結果で、現在の高年層における状況です。高年層が使用しているから、古くから使用されている方言と思いきや、実は、少し前に発生した方言だったということもあるのです。



図2「大きい」の方言(早野2007a)

宮崎市の若年層では、相手に同意を求めるコッセンがよく使用されています。自然会話では次のように使われます。

- ・ ツゴーヨク アルモンジャーネーコッセン
(都合良くあるものではないよね)
- ・ テューカ スーガクイワンガッタコッセン
(というか、数学言わなかったよね)



図3雑誌『Cossen』(ハム&企画)

コッセンは、終助詞の「よね」に対応する表現で、特に女性が使用しています。このコッセンを誌名の由来とする20歳以下の女性を対象とした『Cossen』という雑誌も発行されています(図3)。方言という土地味で田舎的というイメージでとらえられる場合が多かったのですが、現在は方言を誌名とするおしゃれな情報雑誌も発行されているのです。

共通語が新方言に変わる例もあります。「鬼ごっこ」に関して、宮崎県南部域すべてがオニゴッコを使用していましたが、都城市ではツケオニが使用されてきています(図5)。

新方言として発生しても、すぐに使われなくなることもあります。「部活に属していない人」に対して都城市ではビッキョブの使用が確認できます(図5)。これはビッキョ(カエルの方言形)にブ(部)を付けた語形です。図5の調査では80%を越える使用者が30代にいましたが、若年層ではキタクブ(帰宅部)が主流になっています。マスコミの影響がなくても、ある地域で急速に使用者が増える場合もあります。これは意図的に作られた語形で早野(2007a)では「地域流行語」と表現しています。

流行期を過ぎると、一般的な流行語と同様に消滅するのも早いのです。ツケオニ、ビッキョブともに宮崎市では使用者が確認できませんでした。諸県方言と日向方言の地域差は現在でも発生してきているのです。

宮崎市の新方言

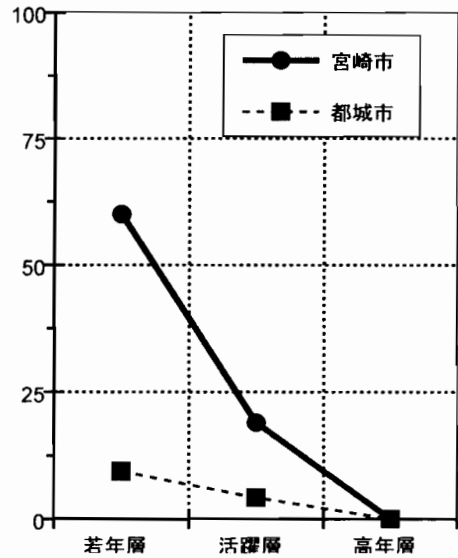


図4 コッセンの使用率(早野2007a)

都城市の新方言

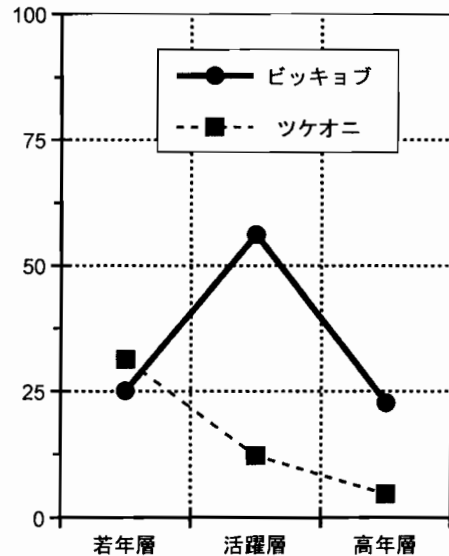


図5 ツケオニ・ビッキョブ(早野2007a)

2.2 伝統的な方言

新方言では語彙を中心に解説しましたので、伝統方言は文法現象を例に解説してみましょう。九州方言の特徴的な現象のひとつに二段活用があります。院政鎌倉時代から江戸時代にかけて起きた二段活用の一段活用化によって、他の地域では一段活用に変化しました。本居宣長『玉勝間』(1793-1801)の七の巻「みなかにいにしへ雅言ののこれる事」には、江戸後期にはすでに方言的特徴となっていたことの記述があります。

二段活用といっても、ピンとこない人もいるでしょうから説明します。たとえば現代語で「起きる」は「oki-・oki-・oki-ru・oki-ru・oki-re・oki-yo(ro)」のように活用します。しかし、平安期は「oki-・oki-・oku-・oku-ru・oku-re・oki-yo」と活用していました。音韻変化などが起きたため、平安時代そのままの形ではないのですが、九州では現在も二段活用が使われています。

国立国語研究所(1991)の『方言文法全国地図2』の「第61図 起きる」(もと上二段活用)・「第64図 開ける」(もと下二段活用)から、九州地方全域と和歌山県の一部に二段活用の使用が確認できます。図7・図8は国立国語研究所(1991)の第61図と第64図から作成したものです。「開ける」では、ほぼ九州全域で二段活用の使用が確認できます。「起きる」では大分県・宮崎県を中心とした九州東部域で主に使用されていることがわかります。早野(2007b)の調査から「起きる(終止・連体形)」は日向方言でオクル・オクッ(二段活用)、諸県方言でオキッ(一段活用)が使われており、「開ける(終止・連体形)」は日向方言でアクル(二段活用)、諸県方言でアクッ(二段活用)が使われていることが確認できます。現在、二段活用はさらに変化しています。「起きる」を例にすると、図6のようになります。宮崎県で「起きる」は、上二段・上一段・五段・下二段・下一段の5つの活用をもっているのです。

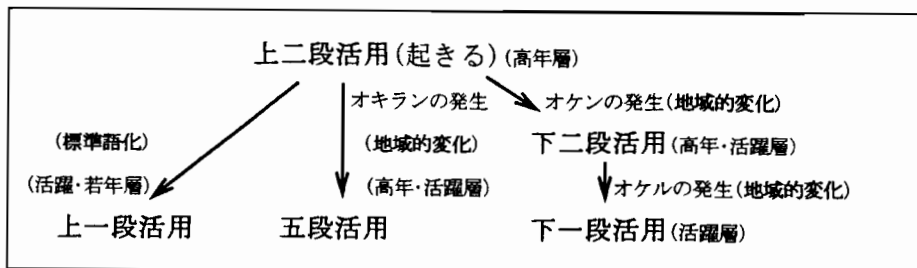


図6 宮崎県の上二段活用の変化(早野 2007b)



図7 「起きる」(終止形)(早野 2007b)

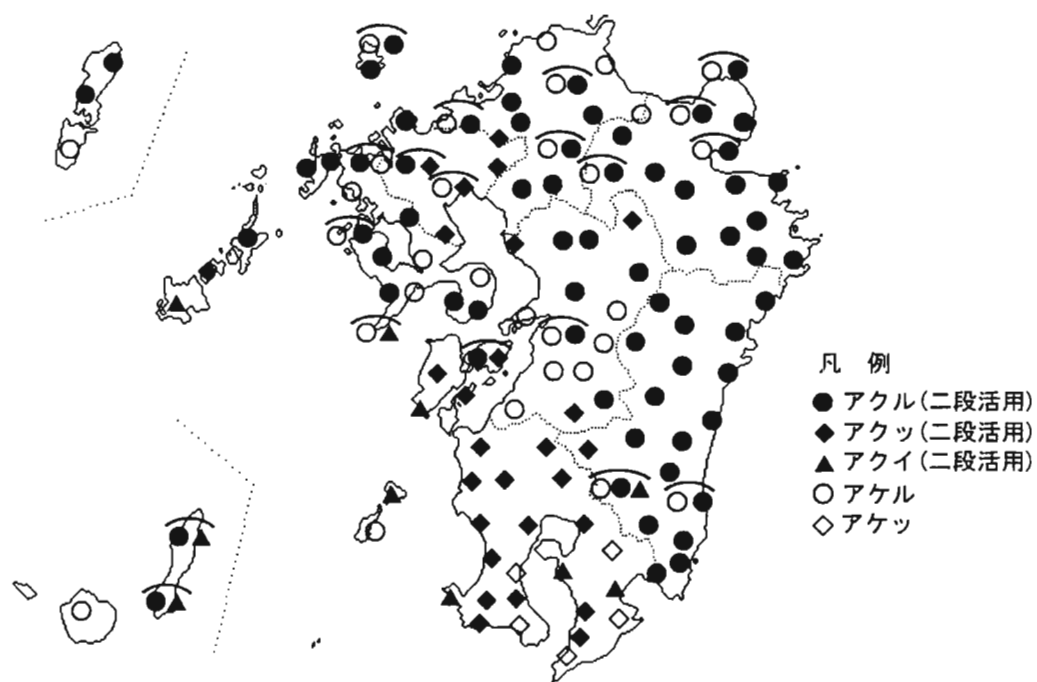


図8 「開ける」(終止形)(早野 2007b)

図6の状況を見ただけでも、方言の複雑さが理解できると思います。ここでは、触れませんでした。共通語や関西方言との中間形も多く発生してきています(早野2005)。方言といっても、通用する範囲はさまざまなのです。

日本語教師の方々に質問します。自分が使っている方言がどの地域、どの世代でどの程度通用するかを理解していますか。方言を教えるための適切な教材はありますか。自分の使っていることばが広く通用するものと思っていたら、実は地域的にも世代的にも限定されていたということはよくあります。安易に方言を教えるてはならない理由のひとつがこの通用範囲なのです。

§ 3. ことばの場面差

金田一春彦(1988 : p.16-17)には、次のような記述があります。

グロータース神父は時々人の意表をつくことを言う人であるが、ある時、「日本人は実に語学の天才だ」と言った。彼に言わせると、「日本人が電話をかけているのを聞いていると、故郷の兄弟に対して話している場合、親しい友だちに対して話している場合、上役に対して話している場合、— この言葉の違いは、ヨーロッパへ行ったら三つぐらいの外国語を使い分けているようだ」というのである。

たしかに、九州の筑後あたりの人ならば、故郷の弟に向かっては、

ソギャンコトワ シェンホーガ ヨカタイ

と言うであろう。が、東京へ出て来て、親しい学友に対しては、

ンナ バカナコトヲ スルヤツガ アルカ

と言えそう。それが社会へ出て上役に対した時は、

サヨーナコトワ オヒカエナスツテワ イカガデショーカ

と言えそうである。

話す相手、つまり場面によってことば遣いが大きくかわるのが日本語の特徴です。日本人は、場面差によって、三つの外国語を使い分けるのに匹敵することばの使い分けをしているというのです。

日本語社会では、場面にあったことばの使い方が求められています。そして、場面

に合わない文体を使った場合、人間関係に影響を与えたり、人格を否定されたりします。ブティックで買物をしている時、見知らぬ店員から「お前、どんな服探してんの」といわれたら、ほとんどの人が腹立たしく感じることでしょう。恋人や親友に言われたら気にならない表現でも、親しくない人にいわれると、感情を害することがよくあります。知らない人や目上の人には高い文体の使用が期待されています。「お前、どんな服探してんの」という例は、その期待に反したために起きたことなのです。店員には「お客様、どのような服をお探ですか」のような高い文体の使用が期待されています。それでは、「お前、どんな服探してんの」と表現した店員は、どのようなことになるのでしょうか。かなりのペナルティを受けるでしょうし、人格も疑われます。親しい者同士で敬語を使って話しても、よそよそしく感じることはあっても、ペナルティを受けたり、人格を否定されることはないでしょう。日本語教育で「です・ます体」や、高い文体が使われる大きな理由のひとつがこのことなのです。

さて、方言の文体を考えてみましょう。方言(地域差のある言語要素)の多くは文体が低いのです。つまり、方言は基本的に親しい者同士が使うことばなのです。真田(1992)では、方言を外国人に限らず、他郷の人が使用することに好意をもって受け入れる人ばかりでないことが指摘されています。鹿浦(1992)は、留学生が関西弁を使うことに関西地区の日本人がどのように感じるかを調査していますが、好意的に受け取らない人が多いという結果がでています。外国人が方言を使った場合、聞き手を不愉快にするばかりでなく、話し手の人格も疑われる場合があるのです。学習者に方言を安易に教育してはいけない理由のひとつが、このことです。外国人が方言をペラペラ話すことを期待する日本人は少ないでしょう。

宮崎は方言主流社会ですので、宮崎で生活するのに方言がわかれば便利です。しかし、既に述べたとおり方言は複雑です。どのような方言を解説すれば不自由しないですむのでしょうか。また、方言を学習することは、多大な労力を必要とします。都城方言話者の会話を日向方言話者は、よく内容がわからないといいます。そのような状況でも、都城方言を勉強しようという日向方言話者はいないでしょう。話し手は、聞き手が親しくなかつたり他郷の人であった場合、共通語を使おうというという心理が働きます。まして、聞き手が外国人とわかれば、共通語を使ってくれる場合がほとんどです。方言ということばの性質を説明するのは良いことですが、具体的な方言の解説については、学習者がかなりのレベルに達してからの方がよいと思います。少なく

とも、初級で解説するのは避けた方がよいのではないかと思います。

§ 4. 地方共通語

方言の多くはくだけた場面で使われると説明しましたが、そうでない方言もあります。その地域では方言(地域差がある)と気付かずに、共通語・標準語として使われることばもあるのです。そのようなことばを地方共通語とか、疑似標準語といいます。代表的な宮崎の地方共通語にはナオス(片付ける)、ハワク(掃く)、カラウ(背負う)などがあります。普通、方言はくだけた場面で使われるのですが、地方共通語はあらたまった場面でも使われるのが特徴です。さらに、あらたまった場面を中心に使われる地方共通語もあります。「勉強サレテクダサイ」「安くデ買えた」などの表現がそうです。これらは、全国共通語を目指しつつも、使い分けが不十分なために発生した現象です。「安くデ買えた」は、ローカル放送のアナウンサーが使うのを聞くだけでなく、新聞広告などにも使われることがあります。図9は「安くデ買えた」の使用意識(方言か共通語か)を宮崎市で調査した結果です。ほとんどの話者が共通語と意識していることがわかります。

この地方共通語に関しては、その地域で共通語と考えられているので、学習者が誤って使ったとしても問題になることはありません。しかし、地域的に制限されていることばなので、やはり日本語教育で扱うべきではありません。この地方共通語に関しては、さらに問題があります。教師が共通語と判断して教えてしまう可能性があるのです。日本語教師には、自らが使っていることばを客観的に判断できる能力が必要なのです。

§ 5. おわりに

方言は通用する地域や世代が限定されています。また、上品なものや下品なものなど、その性質はさまざまです。どうしても方言を解説したいというのであれば、解説すべき方言を選定しなくてはなりません。使用頻度な

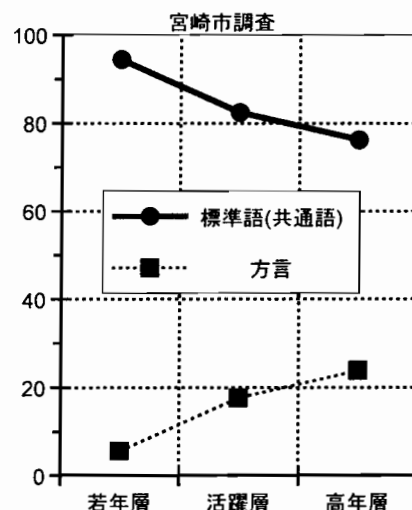


図9 「安くデ」の話者意識

どを手がかりに、基本的な部分を選定することはできるでしょうが、それにはフィールドワークに基づくデータが必要です。ネイティブスピーカーだから大丈夫という発想は通用しません。また、学習者の負担の大きさも考えなければなりません。

同郷出身であってもお互いの趣味が異なれば話しが通じないことがあります。サッカーが趣味の人はサッカー用語をよく使いますが、サッカーに関心のない人には通じないことがよくあります。このような状況を考えると、職業等の関係で方言の理解が不可欠というような場合を除いて、方言の教育にはもう少し慎重になった方がいいでしょう。

実は、方言教育が必要なのは日本語学習者ではなく、日本語教師の方なのです。日本語教師は方言の機能や役割、教育した場合の状況などを十分に認識している必要があるのです。日本語のネイティブスピーカーだからといって日本語教師にはなれないとよく言われます。日本語教師は日本語を客観的に判断する能力が要求されているのです。まず、日本語を教える前に、自分自身が使用している日本語を内省してみてください。

【引用文献】

- 生越直樹(1991)「日本語教育と方言」『新・方言学を学ぶ人のために』(世界思想社)
- 金田一春彦(1988)『日本語 新版(上)』岩波新書
- 国立国語研究所編(1966)『日本言語地図1』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所編(1991)『方言文法全国地図2』大蔵省印刷局
- 佐治圭三(1988)「日本語教育における位相問題」『国語学』154
- 真田信治(1992)「方言の状況と日本語教育」『日本語教育』76
- 鹿浦佳子(1992)「全国ネット版関西弁と標準語との文法差」『関西外語大学留学生別科日本語教育論集』2
- ダニエル・ロング(1992)「日本語教育における「方言教育」の問題点」『日本語教育』76
- 早野慎吾(2006)「宮崎県都城市の言語動態」『Ars Linguistica』13
- 早野慎吾(2007a)「宮崎県の言語動態」『国文学—解釈と鑑賞—』72-7
- 早野慎吾(2007b)「九州方言における二段活用の現況」『Ars Linguistica』14